

## マカオの聖パウロ学院教会堂のファサードの研究

### ―17世紀東アジアの聖母像のイメージソース―

片倉 直子

はじめに

本稿は、一六―一七世紀におけるイエズス会の東アジア布教の拠点となった、マカオの聖パウロ学院教会堂のファサード彫刻装飾について考察を行なうものである。まずイエズス会の東アジア布教において南シナ海沿岸に流通した印刷物あるいは出版物を元に、一六世紀末から一七世紀にかけてマカオに存在したと考えられる聖母の図像について検討する。次に聖パウロ学院教会堂のファサードに刻まれた彫刻装飾とそれらの図像との関係を考察することで、本ファサードの彫刻装飾がどのようにして制作されたのか、またイエズス会の東アジア布教において本ファサードに期待された役割を明らかにすることを目指すものである。

#### 一・聖パウロ学院教会堂とファサードの概要

#### (一) 歴史

MATER DEI, すなわち「神の母の教会」と名付けられたマカオの聖パウロ学院教会堂は、一六世紀後半から一八世紀半ばまでイエズス会の東アジア布教の拠点であった同コレジオに併設されたものである(図1、2)。一五五三年、最初のポルトガル人がマカオに上陸し、貿易港を開いた後、一五六〇年、イエズス会は他のキリスト教修道会に先駆けてマカオに到来し、一五六五年には東アジアを射程とした布教拠点を半島中央部に開き、一五七九年にはモンテの丘に移り規模を拡大した。一五九四年、聖パウロ学院が正式に設立された(1)。

一六〇一年、火災により当時の礼拝堂は激しく損傷したが、早くも翌一六〇二年には再建工事が始まった。本稿で取り上げるのは、この一六〇二年に再建が始まった教会堂のファサードである。ファサードを除く教会堂は一六〇三年には完成し、クリスマスにはミサが行なわれた。

一七世紀後半、イエズス会は布教に際し現地に適応するという、いわゆる順応政策を打ち出した。中国の習慣である祖先崇拜の儀礼、すなわち「典礼」を中国人信徒に許したのである。このイエズス会に対する他の修道会の批判、糾弾は苛烈を極め、教皇庁も正式に中国人信徒の「典礼」の許容を禁止するに至る。これに立腹した清の第五代皇帝雍正帝(在位一七二二—三五)は一七二四年、中国におけるキリスト教禁止令を発布した。イエズス会はかつて活動の後ろ盾であったポルトガルとも対立、一七五九年にポルトガルから追放されたのを皮切りに西欧各国から追放された。一七六二年にはマカオからも追放され、学院の全施設は市の管理下に入り兵舎などに転用されることとなった。一七七三年、教皇庁と欧州諸国との関係改善を企図した教皇クレメンス一四世(Clemens XIV、在位一七六九—七四)によりイエズス会は解散を命じられ、一八一四年の復興まで歴史の表舞台から姿を消すこととなった。一八三五年、大火災によって教会堂を含む学院施設の多くは燃え落ち、現在見られるように教会堂のファサードのみを残す姿となった。以後再建されることなく、跡地は

墓地などに転用された。一八八七年、マカオは正式にポルトガル植民地となった。

一九九九年の中国返還を前にして、一九八八年から一九九五年まで澳門文化學會（現澳門文化局）によってモンテ砦、聖パウロ学院、同教会堂の遺構の発掘調査が行なわれた<sup>(2)</sup>。その後、モンテ砦跡には澳門博物館が、教会堂主祭壇跡の地下には天主教藝術博物館が新設された。

このような経緯で、聖パウロ学院教会堂は多くの資史料を失った。だが今日も我々の目の前には、東アジアに比類なき豊かな彫刻装飾を備えたファサードが厳然と聳え立つ。

## (二) ファサードの概要

聖パウロ学院教会堂はマカオ半島中央部、モンテの丘の西の麓に南向きに建てられている。現在のマカオの中心地であるセナド広場から細い道を何度か曲がりながら北に進むと、イエズス会広場の先、七〇段の大階段の上に聖パウロ学院教会堂のファサードは壮大な門のごとき偉容を現す。ファサードの高さ・幅はともに約二十三メートル<sup>(3)</sup>、ペディメントを含め全五層で構成されている。彫刻装飾の大半を占める浮彫はエンタブラチュアと円柱によって区切られたいくつもの区画の中に収められ、ファサードの中心線を挟んでおおむね左右対称に展開されている。

以下、ファサードの概要を地上に最も近い第一層から順次述べる。

### ① 第一層 「信徒あるいは人間の層」<sup>(4)</sup>

地上の第一層はイオニア式円柱、三つの開口部、そして幾何学的な装飾で構成されている。中央開口部上には教会堂の名称である MATER DEI、すなわち「神の母」の文字が、左右開口部上には IHS、すなわちイエズス会が採用した意匠文字が見られる。向かって左、基底部の西面には聖パウロ学院

教会堂再建工事の礎石が嵌め込まれている。VIRGINI MAGNAE MATRI CIBITAS MACAENSIS LIBENS POSUIT. AN 1602 (清らかにして高潔なる母よ、一六〇二年 マカオ市これを置く)という碑文から、ファサードのみが現存する聖パウロ学院教会堂の再建が一六〇二年、すなわち大火災の翌年に着工されたことがわかる。

この層に彫刻装飾は見られない。この世の信徒たちの通用門であったことを考えると「信徒あるいは人間の層」と呼びうるかもしれない。

## ② 第二層 「イエズス会の層」

第二層にはコリント式円柱、三つの大きな窓と四人のイエズス会士の銅像、そして「シユロの木」の浮彫が交互に並ぶ。銅像台座にはイエズス会士それぞれの名が記されている。向かって左から、イエズス会第三代総長にしてローマ学院の創始者である聖フランシスコ・ボルハ (Francisco de Borja, 1510-72)、イエズス会の創始者である聖イグナチウス・デ・ロヨラ (Ignatius de Loyola, 1491-1556)、東アジア布教の先駆者であり日本にキリスト教を伝えた聖フランシスコ・ザビエル (Francisco de Xavier, 1506-52)、そして学生の守護聖人である聖アロイシウス・ゴンザーガ (Aloysius Gonzaga, 1568-91) の像である。

ここでボルハとゴンザーガは「福者」と記されている。台座にすでに聖人である旨記されているザビエルとロヨラの列聖はいずれも一六二二年であり、ゴンザーガの列福は一六〇五年、ボルハの列福は一六二四年であることから、イエズス会士たちの銅像の置かれた時期はボルハ列福の一六二四年以降であったと考えられる<sup>(5)</sup>。

第二層はイエズス会士に捧げられていることから「イエズス会の層」と呼ぶことができるだろう。

## ③ 第三層 「聖母の層」

第三層ではコリント式円柱と小尖塔で九つに区切られた区画の中に、本ファサード中、最も多量かつ多彩な大型の彫刻装飾群を見ることが出来る。中央アルコーヴ内の聖母像は「六体の天使像」に囲まれ(図3)、その外側には向かって左に「生命の泉」と「船を見守る聖母」(図4)が、右に「生命の木」と「龍の頭を踏む聖母」(図5)が置かれている(6)。「船を見守る聖母」と「龍の頭を踏む聖母」にはそれぞれ小型の聖母像が上部に取り付けられており、アルコーヴ内の銅像と二つの石像を合わせて本ファサードには全部で三つの聖母像を見ることが出来る。小さな聖母像は「船を見守る聖母」では西欧の帆船の上空に浮揚し、「龍の頭を踏む聖母」では七つの首を持つ有翼の竜の中央の頭を踏みつけて立つ。二つの聖母像はいずれも頭から足の先まで衣ですっぽりと覆われ、柔らかな表情で軽く目を伏せ、中央アルコーヴの聖母像に顔を向けて合掌する。「龍の頭を踏む聖母」には「聖母踏龍頭」という漢字の線刻が添えられている。

これらの聖母像の区画の両外側には、オベリスクと一体化した大型のスクロールに各々「悪魔」と「骸骨」が見られる(図6)。向かって左の「悪魔」の図の中央寄りに置かれた漢字の浮彫「鬼是誘人為悪」の意味するところは「鬼とは人を誘惑し悪を為さしめるもの」である。右の「骸骨」の図にも漢字の浮彫「念死者無為罪」が添えられている。本ファサードの彫刻装飾の解説書を二〇一二年に出版したルイス・アントニン・ベルシエはこれを「死を思え、そして罪を犯すことなかれ」と訳している(7)。そして第三層、第四層の両端には合わせて五体の中国の獅子を象ったガーゴイルが躍り出るように置かれている(8)。

第三層には聖母と聖母が退ける悪の図像が配されており、いずれにしても「聖母の層」と呼ぶにふさわしいものとなっている。

## ④ 第四層 「イエスの層」

第四層は第三層と同じくコリント式円柱で区切られ、中央部のみの三区画と小さなスクロールで構成されている。幼子イエス像を中心に「槍」「釘抜き」「ハンマー」「鞭」「茨の冠」「海綿のついた棒」「ローマ帝国の旗」「緑の葦」「三本の釘」「梯子」といった受難の象徴物が置かれている。中央の壁龕に立つ幼子イエス像は、右手を天に掲げ左手は何かを支え持つように手のひらを上に向け、左足を一步前に踏み出す<sup>(9)</sup>。その両側には十字架と受難具を持つ天使が表わされている。

ベルシエによればこの幼子イエス像はかつて権力の象徴である十字架付きの金の球体を左手に持ち、頭上には金の冠を載っていたという<sup>(10)</sup>。現在は失われた部分を含めれば、第四層はイエスの栄光と受難が表わされた「イエスの層」であると言えよう。

また第四層は第三層とオーダーを同じくしていることから、第三層と第四層は一続きのセットであると見なせる。

## ⑤ 第五層ペディメント 「天上の層」

第五層では、中央の銅製の「聖霊の鳩」の左に「太陽」、右に「月」が置かれ、四福音書記者を象徴する「四つの星」が「聖霊の鳩」を取り囲む。幼子イエスの頭上に現われる太陽と月は磔刑の空に現われた日食を象徴するもので、第四層の幼子イエスの壁龕の真上に「太陽」と「月」を並べて置くことで、第五層ペディメントと第四層のイエスの受難とのつながりが巧みに演出されている。

第五層は、天の聖なる父と聖霊が表わされていることから「天上の層」であると言えよう。

## 二・ 先行研究と課題の抽出

澳門理工學院の邢榮發は、本ファサードの様式、装飾、そして中国美術との関係性にまで踏み込み詳細に検討した論考において、ファサード各部の比率を分析し、本ファサードには西欧式の幾何学的設計手法が適用されていることから、設計者は西洋の建築設計に通じた人物であると結論付けている<sup>(11)</sup>。

建築史家の西山マルセーロ宗雄は、様式について、本ファサードはセルリオ建築の流れにありつつも、インドとオリエントの変換と混合によって特徴付けられる一六一―一七世紀のポルトガル・マヌエル建築と、アジアで展開したイエズス会建築とがハーモニーを奏する後期マヌエル建築の傑作であり、結果的にイタリア式建築ともローカルの建築とも無縁のものであると評している<sup>(12)</sup>。

本ファサードについて多角的に検討、分析を行なっている澳門利氏學社 (Macau Ricci Institute) のセザール・ヌーネスもまた、様式について、すでにセルリオ、パツラーディオ、ヴィニョーラの挿絵入り建築書がイベリア半島に伝わり研究書が出版されていたことから、ルネサンスやマニエリスムを知った者の設計によると指摘し、スペインとポルトガルのマニエリスムあるいはバロックの建造物であると評している<sup>(13)</sup>。

またヌーネスはイエズス会の小ヘロニモ・ロドリゲスの一六二七年年次報告を元に教会堂とファサードの改修について考察しているが<sup>(14)</sup>、その中で、当初の設計段階ではただ「聖母に捧げる教会堂であること」とだけ指示がなされファサードはイエズス会式の簡素なものであったが、支援者であるマカオの豪商が派手なバロック風装飾を好んだため豪華な装飾が施されることになったのだと指摘している。

本ファサード装飾と中国美術との関係について邢は、本ファサード上では西洋と中国の彫刻手法

が混在し見事な融和を見せていると評し<sup>(15)</sup>、「六体の天使」について、中段と下段の天使が座している雲の、特に渦を巻くような花形の表現について「聖母の周りの天使が乗る雲の彫刻手法は明らかに中国式である」<sup>(16)</sup>と指摘している。これはイエズス会東アジア巡察師、すなわち東アジア布教の実質的な責任者であるアレックスサンドロ・ヴァリニャーノ (Alessandro Valignano, 1539-1606) が東アジア布教の基本戦略として打ち出した順応政策を意味している<sup>(17)</sup>。

だが基本的には、聖パウロ学院教会堂もセルリオの建築言語を踏襲したものであるには違いない。西山やヌーネスが指摘するような数々の特徴があるとはいえども、やはりそのファサードはイエズス会アジア布教の教会堂建築の様式をよく表わした作品であるといえよう。

このように、ファサードの様式、あるいは中国美術との関係については先行する論考が見出せるが、各モチーフのイメージソースに関する研究には再考する余地があると考えられる。そこで本稿ではできる限り具体的なイメージソースを特定することを試みたい。

### 三・聖母像のイメージソースの検討

#### (一) 西欧の図像 布教に用いられた銅版画

ヌーネスは一五〇〇年頃の聖務日課書に収められていた《Tota Pulchra (すべて美しい)》の図版を示している<sup>(18)</sup>(図7)。澳門文化學會のフェルナンド・ペレイラは、「ペディメントと聖母像制作の際、手本となった可能性がある」としてフィリップ・メンゼルによる一五八二年の《太陽聖母(太陽をまとう聖母)》を示している<sup>(19)</sup>(図8)。本ファサード上には「龍の頭を踏む聖母」の大型

の浮彫が見られるが、ヌーネスが示した聖母子像には「七つの頭を持つ竜」が見られない。一方、ペレイラの示した聖母像にはこれが描かれていることから、後者の図像のほうがファサードとの共通性がより高いと言えるだろう。しかしながら、ペレイラが参考作品として挙げるに留まったこの聖母子の図像と本ファサードの聖母子図像とは、どのようにつながる可能性があるのだろうか。

カトリック神学者のヴァルター・デューリツヒによれば、イエズス会の神学者であるペトルス・カニシウス (Petrus Canisius, 1521-97) による一五七七年発行の『比類なき聖母マリア、神の聖なる母』<sup>(20)</sup>が各地のイエズス会団体に配布されたという<sup>(21)</sup>。当時、ポルトガルからゴアへは原則的には年一回、定期的に船が出ていたことから、出版から長く置くことなく同書がマカオのイエズス会士の元にも届いたことが十分考えられる。ヴァリニャーノが巡察師としてゴアを発ち初めてマカオに向かったのが同書発刊の年、一五七七年の九月であることから、ヴァリニャーノ自身が同書をマカオに持ち込んだ可能性すら考えられる。

そこで筆者が同書の挿絵を調べてみると、ペレイラが示した図と同様の銅版画<sup>(22)</sup>(図9)が収載されているのである。このカニシウスによる一五七七年の公教要理集に収載された銅版画と本ファサードの彫刻装飾とを比較してみたい。

### ① 聖母子像について

カニシウスが採用した銅版画の聖母は太陽をまとい、幼子イエスを腕に抱き、冠を戴き三日月を踏んでいる。頭上には「天の父」と「聖霊の鳩」が描かれ、その左右には「太陽」と「月」、そして Stella Maris (ステラ・マリス) という文字が添えられた「星」が描かれている。足元には「七つの頭を持つ竜」が置かれている。聖母子は聖母の純潔の象徴に取り囲まれているが、その内、「聖霊の鳩」「太陽」「月」はファサード上ではペディメントに、銅版画の聖母子右下の「生命の泉」は

第三層の聖母のアルコーヴ左側に見出せる。同じく「生命の木」は聖母のアルコーヴの右側に、また第二層に「シュロの木」を見出すことができた。「七つの頭を持つ竜」は第三層の聖母のアルコーヴ近くに「龍の頭を踏む聖母」として大きく表わされ、銅版画右上のステラ・マリスの「星」はおそらく、ファサード上では「船を見守る聖母」に写されているのである。ステラ・マリスと「船を見守る聖母」との関係については後述するが、こうしてこの銅版画に描かれた象徴物の数々がファサード上に写されていることから、当時最新の公教要理集である『比類なき聖母マリア、神の聖なる母』に添えられた聖母子の銅版画のような凶像を元に、聖パウロ学院教会堂のファサード彫刻が制作されていることが確認できたと考える。さらにその流通の経緯に鑑みれば、まさにこの銅版画そのものが本ファサードの直接の手本となった可能性が考えられることを指摘したい。

だが銅版画と本ファサードとの看過しえない大きな違いは、中心となる聖母の描き方である。銅版画の聖母は幼子を抱く聖母子像であるが、ファサード上では聖母像は第三層中央に、幼子イエス像はその頭上第四層中央に分けられている。その理由について考察を試みれば、聖パウロ学院教会堂、すなわち MATER DEI 教会堂は聖母に捧げられたものであるから彫像装飾群の主題は聖母であり、それゆえ聖母は中央の、幼子イエスの壁龕と比べてもひとときわ大型のアルコーヴ内に置かれているのである。しかしあくまでも、受肉した救世主は全ての被造物の最上位に立つ存在であらねばならない。したがって本ファサードでは幼子イエス像を第四層に、その下に聖母像を分けて置くことで、幼子イエスの至高性を損ねることなく聖母を主役として際立たせる形で、カニシウスの聖母子の変奏が行なわれたものと考ええる。

## ② 「被昇天の聖母」について

『比類なき聖母マリア、神の聖なる母』にはもう一点、本ファサード第三層アルコーヴ内の聖母

像との関係を思わせる銅版画が収められている<sup>(23)</sup>(図10)。この銅版画の聖母は六体の天使に伴われ、内二体は聖母の足下の三日月を支えている。聖母は、三体の天使が捧げ持つ冠を頭上に戴き現身のまま天に上ろうとする「被昇天の聖母」である。

イエズス会士にして学院の神学教師であったアントニン・フェレイラの一六四四年の年次報告には「第三層、円柱と円柱の間に立つのは被昇天の聖母で、教会の名はこれに由来する」と記されている<sup>(24)</sup>。本ファサードでは聖母の昇天を寿ぐ六体の有翼の天使像が片側三体ずつ、聖母像の立つアルコーヴを取り囲んでいる。天使はいずれの側でも上段・中段・下段の三段に秩序正しく並び、中央の聖母像に体を向ける。上段の天使は跪いて合掌し、中段は雲上に座してラツパを吹き、下段はやはり雲上に座して香炉を振る。

ファサード上の聖母の周囲には「頭上の天使」も「冠」も「足下の月」も見られないが、一六四四年にフェレイラはファサード上に「冠」と「月」の存在を報告している<sup>(25)</sup>。この報告を引くことでヌーネスは、「聖パウロ学院教会堂のファサードは祭壇ファサードである」との自らの主張を強調しつつ、中央アルコーヴの聖母像が「被昇天の聖母」であるとしている。焼失した聖パウロ学院教会堂の主祭壇に置かれた「被昇天の聖母」の姿を伝える記録は見出されていないが、フェレイラが目撃談によりファサードの中心に立つ聖母は「被昇天の聖母」であることが明らかとなった。そこで聖パウロ学院教会堂のファサードの聖母像と銅版画の「被昇天の聖母」を比較してみる。

まず俯瞰的に、聖母のプロポーション、顔をやや斜めに傾け交差した両腕を胸の上に置くポーズなど全体的なフォルムの特徴に共通点が見られる。また聖母を取り巻く「六体の天使像」の配置にも類似性が感じられる。もともと、ファサード上ではアルコーヴ内に聖母像を納めたことで、銅版画から離れた編集を施す必要があったことは容易に想像できる。また、ファサード上の天使たちが手にしているラツパや香炉は銅版画には見られない。こうして細部を比較すれば異なる点は確かに

少なくない。しかし少なくとも天使像の配置や先に述べた聖母のポーズやプロポーションといった共通点により、ファサード上の聖母像とカニシウスが採用した「被昇天の聖母」の銅版画とが全く無関係であるとは考えにくい。先に論じたように、ファサード上ではカニシウスの聖母子の銅版画の内容が取捨選択されあるいは再編集され、また聖母子像が第三層と第四層に分けられていたように、「被昇天の聖母」の銅版画も編集を施されつつ他の複数の図像と組み合わせる形で着想源の一つとされた可能性があると考ええる。以上のことから、第三層中央部から第四層と第五層ペディメントを縦に貫く中央部の彫刻装飾群は、その多くをカニシウスの『比類なき聖母マリア、神の聖なる母』の挿絵に負っている可能性を指摘したい。

イエズス会の神学者であるカニシウスは当時、対抗宗教改革における論争においてイエズス会として打ち出すべき聖母の純潔性の表現を最前線に立って論じた人物の一人である。まさにそのカニシウスが、聖母の純潔と、聖母とイエス・キリストとの特別の関係を説いた著作に採用した挿絵から着想を得たとみられる本ファサードは、当時のイエズス会の最先端の教義を正しく反映したものであるといえよう。

(二) 中国の図像 「海の星」と「媽祖(まそ)」

① 「海の星」としての聖母

このようにしてその教義を強調していたイエズス会であるが、先に述べたように東アジア布教ではインドなどは異なる戦略、すなわち順応政策が採られていた。日本と中国の当時の社会や文化を「高度に発達したものと捉え、強引かつ一方的な布教では反発を招くばかりで成果に結びつくとは到底見通せないとの判断から、ヴァリニャーノは東アジア布教において順応政策を戦略の基本

としたのである。では、本ファサードの彫刻装飾にも順応政策は反映されているのだろうか。

先に、カニシウスの採用した聖母子像の要素が聖パウロ学院教会堂のファサードに採用されたこと述べたが、その中にファサード上でひととき大きな面積を占めているものが二つある。それは第三層の「船を見守る聖母」と「龍の頭を踏む聖母」である。二つの浮彫には同じ構想で造形された小型の聖母像が一つずつ取り付けられている。「船を見守る聖母」では、高波の海を行く西洋の帆船を空中に浮揚する聖母が見守っている。「龍の頭を踏む聖母」では、聖母が七つの頭を持つ有翼の竜の中央の頭を踏みつけて立っている。言うまでもなく、後者は新約聖書に現れる「黙示録の女」が聖母に転嫁されたものである。「船を見守る聖母」と「龍の頭を踏む聖母」は中央の「被昇天の聖母」を挟んで対称の位置にあり、おそらくはファサード上で共通する何らかの働きが期待されているであろうが、「龍の頭を踏む聖母」が聖母に関する重要な説話を絵解きしているのであるならば、対となる「船を見守る聖母」は何を語っているのだろうか。

『比類なき聖母マリア、神の聖なる母』の聖母子の銅版画に立ち返ってみると、聖母の左肩に描かれた「星」には Stella Maris という文字が添えられている。ステラ・マリスすなわち「海の星」とは「聖母の呼称のひとつで、『古代以来、船を導く海の星』である」<sup>(26)</sup>と解釈されてきた。英文学・英国文化研究者の石井美樹子は「星のマリア」「海のマリア」の信仰が民間に確立する過程を辿るとともに、これらに捧げられた讃歌をいくつか紹介しているが、そのうちのペトラルカの「星のマリア」<sup>(27)</sup>に海難とステラ・マリスとのつながりがよく見える。

輝く乙女よ、強固にして永遠なるお方よ、

波のさか巻く嵐の海の星よ、

腕利きの舟のりのよき導き手よ、

わめき泣き叫ぶ者たちのほうへ、心をお向けください

石井は、ペトラルカの言う「嵐の海」とは「人生という荒波を泳ぎぬくための道しるべ」であり「星」は「希望への道を指し示す明けの明星」であると解釈しているが、こうした表現と解釈の積み重ねにより、やがてステラ・マリスが直接的に「航海者を庇護する海の星」としての役割を期待されるものへと変容していったと考えられよう。これらのことから、銅版画のステラ・マリスはファサード上では「船を見守る聖母」として表現されていると思われる。

しかし、「黙示録の女」の図像の伝統には本ファサードと類似した先例が数多くあるにもかかわらず、ステラ・マリスには「船」と「聖母」の組み合わせで表現された先例を管見にして見出すことができなかった。同時代までの「ステラ・マリス」にも、あるいは先に検討した『比類なき聖母マリア、神の聖なる母』にも船が画中に大きく描かれるような作例を見出すことができなかったのである。では、「船」の上空に「浮揚する聖母」を組み合わせた図像は何を手本にし何に着想を得たものなのであろうか。

そこで想起されるのが中国における海難守護神である女神「媽祖」なのである。

## ② 海難守護の女神「媽祖」

媽祖とは中国沿岸部から周辺のアジア諸国における、主として航海と漁業の守護神である道教の女神である。宋代、一〇世紀頃から、南シナ海を中心に今日まで広く篤く信仰され続けてきた。そもそも「マカオ（媽港）」という土地の呼称の由来であるともいわれている。媽祖信仰の原型となったのは、一〇世紀後半に福建に実在した評判の高い巫女の逸話であったとみられる。福建の船乗りの活動が活発になるとともに媽祖信仰は各地に伝えられ、地域の信仰や伝承を飲み込みながらや

がて強大な力を持つ女神として日本を含むアジアの海洋圏に広がっていった<sup>(28)</sup>。

宋代から元、明代を通じて伝えられてきた媽祖の力は、説話集や小説として明代後半からまとめられ出版されるようになった。その中の一つが、明末、一六二八年までに成立した『天妃顯聖録』である<sup>(29)</sup>。一九六〇年に同書を校点付き（校訂し句読点をつけること）で現代の活字に起こし出版した臺灣銀行の『天妃顯聖録』の解説によれば、その原本及び挿絵は確認することが難しい状態とのことであるが<sup>(30)</sup>、『天妃顯聖録』に収められた説話をほぼそのまま受け継ぎ挿絵を添えた『天后聖蹟圖誌』が清代に刊行され数種の重刻が現代に伝わっている。そこに収められた木版画には、荒れた海で苦難に陥った船の上空に媽祖が現われる図像をいくつか認めることができる<sup>(31)</sup>。その一例として「遇風濤乗槎掛蓆」を見てみると（図11）、荒れた海で波に翻弄される一艘の船上ではある者は慌てふためき、ある者はなすすべもなく座り込んでいる。その頭上に雲に乗った媽祖が現前している。

海難守護神としての媽祖の説話の多くは、おおむね次のような構造を見せる。それは「何らかの使命を持った者が航海に出る、すると途中で海が荒れ危機に瀕する。乗組員は恐れ祈る。そのとき媽祖あるいは媽祖の化身が中空に姿を現し海が鎮まる。そして媽祖は時の皇帝から手厚く祭られ新たな称号を付与される」といった形式である。明末の『天妃顯聖録』に収載されている説話の例について筆者の試訳を示す<sup>(32)</sup>。

○明代、鄭和に関する説話 「廣州救太監鄭和」

永樂元（明、一四〇三）年、全權大使・鄭和はシヤムに向かった。広州付近で風が出て船が転覆しそうになった。乗員たちは天妃に祈った。鄭和は「私は使命を持って国を出たが、このよ  
うな風雨に遇い危機に陥っている。私の命は惜しくないが、天子に報いることができなくなる

ことを恐れる。そして数百人の命がかかっている。神妃よ、助けたまえ」と祈った。すると鳴り響く楽の音とともにかぐわしい一陣の風が吹き、神妃が帆先に立つのが見えた。たちまち風がおさまり波は静まり、再び無事に進むことができた。「鄭和は」帰朝後、これを皇帝に奏上すると、「皇帝は」官吏を遣わし古い「媽祖」廟を整えさせた。同時に宝物と金五〇〇貫を供え、湄洲島で祭祀を執り行なった。(『天妃顯聖録』明末、一七世紀) (「」内は筆者による補足)

### ③ 媽祖に仮託された聖母像

ステラ・マリスすなわち「海の星」とは航海に出た者たちを見守る星であり船を導く海の星である。この解釈が、本ファサード上では媽祖の姿に仮託され「荒れた海を行く西洋の帆船を見守る聖母」として、わかりやすく、現地の人々にいわば絵解きとして具体的な形を与えられているものと筆者は考える。聖母の姿も媽祖の姿も常に天を仰ぎ見て祈りを捧げる海の人々のその祈りの先にあり、両者のイメージはそこで重なり合う。聖パウロ学院教会堂においてイエズス会は、ステラ・マリスとほぼ同じ力を持つ中国の女神「媽祖」のイメージを重ねて表現することで、南シナ海を拠点とする人々にとってわかりやすい形で聖母の力を説明しようとしたのではないだろうか。

ローカルな、しかも異教の女神である媽祖のイメージがためらいもなく取り入れられた背景には、イエズス会の東アジア布教の方針である順応政策があったものと考ええる。

## 四・マカオの聖パウロ学院教会堂のファサードとは何か

本稿では、マカオの聖パウロ学院教会堂ファサード上に現われる聖母像に関連するイメージソースについて、二つの視点から検討した。

一つに、本ファサードは、イエズス会の当時の最新の公共要理集であったカニシウスの『比類なき聖母マリア、神の聖なる母』に収められた銅版画をファサード上で展開していることを示した。また、聖母の力の一つである船員の守護者としての「ステラ・マリス」すなわち「海の星」を南シナ海の人々に図解で示すために、同じ力を持つ中国の女神「媽祖」の図像が取り入れられている可能性を指摘した。

以上により、本ファサードは当時のイエズス会の最新の教義を正確に東アジアに伝えようとするものでありつつ、その本質は「順応政策のファサード」であると筆者は考える。当時の最新の聖母崇敬の思想を大きく打ち出すとともに、彫刻装飾に中国式の表現を取り入れたり、聖母の力をわかりやすく伝えるべくローカルな女神である媽祖のイメージを重ね合わせて図解するなど、現地の事情にかなり順応した柔軟な姿勢による制作が行なわれたのである。その結果、他に類を見ない自由な図像選択、配置、造形表現が聖パウロ学院教会堂のファサード上に実現したものと考える。

## 注

- (1) 学院の歴史については主に以下の文献を参考にした。戚印平『澳門聖保祿學院研究 兼談耶穌會在東方的教育機構』澳門特別行政区政府出版局（澳門）、社会科学文献出版社（北京）、二〇一三年、および李向玉『汉学家的揺籃 澳門聖保祿學院研究』中华书局（北京）、二〇〇六年
- (2) 発掘調査報告論文集が刊行されている。澳門博物館項目組『與歷史同步的博物館 大炮台』曾永秀（中文翻譯）、

- 澳門博物館（澳門）、一九九八年（原書：*Um Museu em Espaço Histórico -- A Fortaleza de S. Paulo do Monte*）
- (3) Nuñez, César Guillén, *Macao. s Church of Saint Paul, A Glimmer of the Baroque in China*, Hong Kong University Press, 2009, p. 126 現地における実測でも確認できた。
- (4) 以下、各層の名称は筆者による命名である。
- (5) 一六三六年に当地を訪れ一六三七年に旅行記を記したイギリス人旅行者ピーター・ムンデイの紀行文が存在する (Boxer, C.R. (Charles Ralph), *Macao na Época da Restauração / Macau three hundred Years ago*, Fundação Oriente, Lisboa, 1993)。ムンデイは教会堂内部について記述しているがファサードには言及していないことから、彼の来訪時にはまだファサードが完成していなかった可能性を考えておく必要がある。またヌネスが引用するフェレイラの一六四四年の年次報告 (Nuñez 前掲書 p. 119) などから、ファサードの完成は概ね一六四〇年頃と考えられる。
- (6) 「船を見守る聖母」「龍の頭を踏む聖母」の呼称は筆者による。
- (7) Berchier, Louis Antonin 『澳門大三巴牌坊的奥秘』 Gongao Xavier, 竜裕琛訳、謎出版及發行有限公司（澳門）、二〇一二年、三七頁。原書はポルトガル語。他に英語版あり。
- (8) Nuñez 前掲書 p. 127 ヌネスはこの獅子像を日本と中国の装飾の意匠が使われた「芸術的順応政策の好例」と評している。
- (9) 邢榮發「澳門聖保祿會院教堂前壁立面研究」『文化雜誌』第五九期（二〇〇六年夏季刊）、澳門特別行政区政府文化出版局（澳門）、一一三頁
- (10) Berchier 前掲書 三九頁。また、フェレイラの一六四四年年次報告には「地球の上に載った十字架を手を持ち」と記載されている (Nuñez 前掲書 p. 119)。
- (11) 邢榮發「澳門聖保祿會院教堂前壁立面研究」『文化雜誌』第五九期（二〇〇六年夏季刊）、澳門特別行政区政府文化出版局（澳門）、一一三頁

- (12) Nishiyama, Marcelo, "A study of the church of St. Paul in Macao and the transformation of Portuguese architecture" *Historical Constructions*, P.B. Lourenco, P.Roca(Eds.), Guimaraes, 2001, pp.237-245
- さらに西山は、アジアのポルトガル建築をつぶさに比較検討し、本ファサードの様式と装飾の性質を明らかにしている。その特徴は多量の装飾を有すること、そして他に見られない五層のファサードを実現するために第三層と第四層の幅を大きく減じなければならなかったが、それをスクロールを二回用いることで解決しているということだ。(西山マルセロ「スペイン・ポルトガルの植民地における建築活動とその様式変遷の研究」『その四 マカオの聖パウロ学院教会のファサード構成について』、『日本建築学会大会学術講演梗概集(中国)』一九九九年九月、一五九—一六〇頁)。ヌーネスもまた、本ファサードは高さを出すことを重視したもので、三種類のオーダーが使用されているのもそのためであると指摘している(Nuñez 前掲書 p.127)。
- (13) Nuñez 前掲書 p.127
- (14) Nuñez 前掲書 pp.113-114
- (15) 邢 前掲論文 三二二頁
- (16) 邢 前掲論文 三〇頁
- (17) 邢はまた、東西の表現が混在する理由として、中国布教における一つの基本原則を挙げている。それは、中国人は知恵と理解力を有し道徳的規範や科学に興味を持つ人々であるから、聖パウロ学院教会堂が伝達する内容は中国人が受け入れやすい文化的要素を取り入れるべし、ということだ(邢 前掲論文 三〇頁)。
- (18) Nuñez 前掲書 p.136
- (19) 澳門博物館項目組 前掲書 三八頁
- (20) カニシウス『比類なき聖母マリア、神の聖なる母』 原題 Canisius, Petrus, *De Maria, Virgine incomparabili et Dei Genitrice sacrosancta, Cum PONT. MAX & CAESAR. MAIEST. Gratia & Priuilegio*, 1577
- (21) Walter Durig, *Die Laurentianische Litanei, Entstehung, Verfasser, Aufbau und mariologischer Inhalt*,

EOS-Verlag, Sankt Ottilien, 1990, s. 11f を参照した。

- (22) Canisius 前掲書 p. 291
- (23) Canisius 前掲書 p. 524
- (24) Nuñez 前掲書 p. 119
- (25) Nuñez 前掲書 p. 119
- (26) 大貫隆、名取四郎、宮本久雄、百瀬文晃編集『岩波キリスト教辞典』、岩波書店、二〇〇二年、一三〇頁
- (27) 石井美樹子『聖母マリアの謎』、白水社、一九八八年 一〇八—一〇九頁
- (28) 媽祖信仰の歴史と広がりについては、朱天順『媽祖と中国の民間信仰』平河出版社、一九九六年、及び媽祖兒『海の女神 媽祖ものがたり』林清美訳、長崎文献社、二〇〇八年、(原書『和平女神—千禧天后』、あるいは松本浩一「船人たちが伝えた海の神—媽祖信仰とその広がり」、『アジア遊学(特集 波騒ぐアジア)』第七〇号、二〇〇四年十二月、一六四—一七三頁、または『一九九五年澳門媽祖信俗歴史文化検討會論文集』一九九八年四月、澳門文化研究會、澳門海事博物館(澳門)等を参照した。
- (29) 『天妃顯聖録』の正確な成立年が定かでないため、編者である林堯俞の没した一六二八年を仮に想定した。
- (30) 『天妃顯聖録』(臺灣文献叢刊 第七七種)、臺灣銀行研究室編印(台北)、一九六〇年、七八—八〇頁。または横田隆志「国立公文書館本『天后顯聖録』」(上) 翻刻と解説『文化學年報』第二五号、二〇〇六年三月、九—九四頁を参照。
- (31) 『天妃顯聖録』以外にも、明代に刊行された書物には一〇世紀から民間に伝わる媽祖の物語が読みやすく親しみやすい形で整理されている。『天妃顯聖録』に先立ち一五七三年に成立したとみられる『天妃娘媽傳』は、媽祖すなわち林默娘の出自に関する物語が多くを占め、各ページに添えられた挿絵は版面上半分程度のものであるが(胡從經「明版通俗小説『天妃娘媽傳』初探」『一九九五年澳門媽祖信俗歴史文化検討會論文集』一九九八年四月、澳門文化研究會、澳門海事博物館(澳門)、七一—七五頁(図版含む)、及び吳还初撰、黄永年标点『天妃

(32)

娘妈传』上海古籍出版社（上海）、一九九〇年）、その後の『天妃顯聖録』では黙娘の神功に関する説話が中心となり、媽祖の力が前面に押し出され、清代の『天后聖蹟圖誌』では挿絵は大型化し版面全てを占めテクストの見開きに置かれる形式へと変わっている。こうした媽祖の描かれ方の流れを検分してみれば、媽祖に対する信仰が時代を追うごとに強く大きなものになる一方で、人々が媽祖を身近なものとして親しく感じていたであろうことが読み取れるのである。

底本は前掲の臺灣銀行研究室編『天妃顯聖録』。

図版集



図 1.  
聖パウロ学院教会堂  
ファサード

図 2.  
聖パウロ学院教会堂  
ファサード装飾図

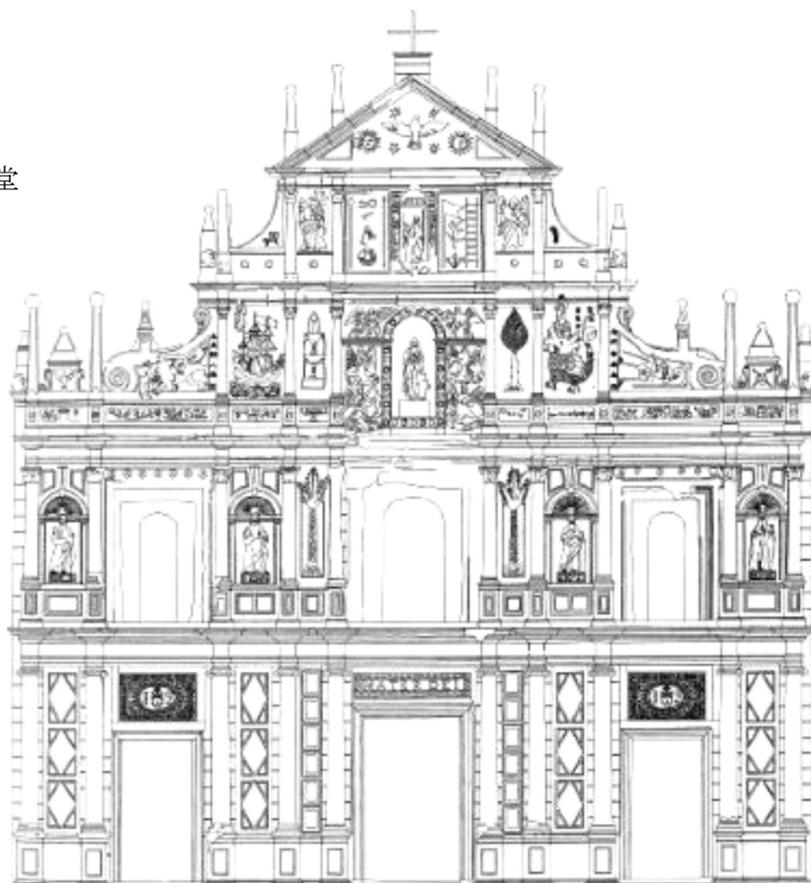




図 3.  
第三層 聖母のアルコーヴ



図 4.  
第三層 「船を見守る聖母」



図 5.  
第三層 「龍の頭を踏む聖母」



図 6. 第三層全景と、第四層、第五層ペディメント



図 7.  
《Tota Pulchra》1500年頃



図 8.  
メンゼル《太陽聖母》1582年



図 9.  
カニシウス『比類なき聖母マリア、  
神の聖なる母』1577年の《Tota  
Pulchra》



図 10.  
カニシウス『比類なき聖母マリア、  
神の聖なる母』1577年の《被昇天の  
聖母》



図 11.  
「遇風濤乘槎掛蓆」  
『天后聖母聖蹟圖誌』（清代）より

図版出典

- 図 1. 聖パウロ学院教会堂 ファサード <http://www.hbc.co.jp/snowfes2016/>
- 図 2. 聖パウロ学院教会堂ファサード装飾図 刘先觉『澳门建筑文化遗产』、东南大学出版社（南京）、2005年より
- 図 3. 第三層 聖母のアルコーヴ 筆者撮影
- 図 4. 「船を見守る聖母」 筆者撮影
- 図 5. 「龍の頭を踏む聖母」 筆者撮影
- 図 6. 第三層全景と、第四層、第五層ペディメント 筆者撮影
- 図 7. 《Tota Pulchra》1500年頃 Nuñez, César Guillén, *Macao's Church of Saint Paul, A Glimmer of the Baroque in China* より
- 図 8. メンゼル《太陽聖母》1582年 澳門博物館項目組『與歴史同歩的博物館 大炮台』曾永秀（中文翻譯）、澳門博物館（澳門）、1998年より
- 図 9. 《Tota Pulchra》カニシウス『比類なき聖母マリア、神の聖なる母』1577年より
- 図 10. 《被昇天の聖母》カニシウス『比類なき聖母マリア、神の聖なる母』1577年より
- 図 11. 「遇風濤乘槎掛蓆」『天后聖母聖蹟圖誌』（清代）より